

週刊センターニュース No.28



第28号(2004年9月21日) 毎週月曜日発行
発行: 金沢大学 大学教育開発・支援センター
URL: http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daikyou_rche/index.htm

共同学習会のご案内

第37回 日時: 9月21日(火) (13時30分~15時)
場所: 角間キャンパス総合教育棟南棟2階 大会議室
講師: 木越 治 教授 (文学部FD委員長)
題目: 「文学部のFDについて」

GSIC講演会 2004 参加報告

8月30日(月)に東京工業大学大岡山キャンパスで開催されたGSIC講演会2004に参加した。GSICとは東京工業大学の学術国際情報センターの略である。今回の講演テーマは「MIT OpenCourseWare: A New Model for Open Sharing (知識資源共有の新しいモデルとしてのMIT OpenCourseWare)」であった。講演者はMIT(Massachusetts Institute of Technology)のOpenCourseWare(以下OCWと略す)の最高責任者であるAnne H. Margulies氏であった。高等教育とインターネットとの関わりで大きなインパクトを与えているMITのOCWについて、「1. Vision/ 2. Implementation/ 3. Impact/ 4. What does it mean?」の4つの点から説明がなされた。OCWについてのより具体的な情報は<http://ocw.mit.edu/>を参考にしていきたい。

「1. Vision」において、インターネットと大学のミッションをどう結びつけるかを検討する過程でOCWが生まれたというコメントの後、以下のように、具体的にこれまでの経緯について説明があった。1999年秋、委員会設置。2000年秋、学長へ提言。2001年4月、マスコミへ公表。2001年6月、資金獲得(複数の財団から)。2002年9月、パイロット運用開始(50コース、23学科)。2003年9月、正式運用開始(500コース、5学部、33学科、MITの学部・学科の全て)。2004年9月、900コースへ。MITにとってOCWは「MITの教育ではない」、「双方向授業の提供を意図しているのではない」、「遠隔授業への第一歩ではない」という点や、MITはOCWに関して「MITの全てのマテリアルをWebを通して全世界へ公開する」、「OCWのコンセプトを広める」という2つのミッションを持っている点についても説明がなされた。OCWは全体としては、第一段階:パイロット期(~2003、500コース)、第二段階:拡張期(~2007、1800コース)、第三段階:安定期(2008~、1800コース)の3段階で進められている。

「2. Implementation」では、現在提供されているコースを紹介しながら、「5学部33学科からコースを提供することによる多様性」、「全てのコースにシラバス、授業進行スケジュールがある」、「98%のコースに課題、94%のコースに文献リスト、78%のコースに講義ノートがある」、「試験を公開しているコースもある」、「ビデオ映像があるのは65コース」、「学習者コミュニティを開設しているコースもある」、「学習者参加によるプロジェクトを設定しているコースもある」といったコメントがあった。OCWの具体的なコース作成の手順は、以下の通りである。1. 学科に対してコース募集。2. 計画(マテリアルの変換、画面デザインなど)。3. 作成。4. 公開。5. サポート。また、OCWは「非営利、MIT

の名前と原著作者を明記、「share alike」と明記」すれば再利用可能であるとしている点は、インターネットと高等教育の関わりの点で、非常に画期的なことのように思われた。

「3. Impact」については、正式運用して一年足らずのため、まだ十分には分析できてはいないということであったが、「一日あたりのアクセス数、約 11,000 件。リピーターは月 142,000 件」、「アクセス数の多い順位：1.中国、2.インド、3.カナダ、4.韓国、5.台湾、6.イギリス、7.日本、8.ドイツ、9.ブラジル、10.イタリア」、「アクセスの半数(52%)は自主学习」、「教師が授業で使うケースも 13%ある」、「自分の授業改善に利用している教師が多い」という内容が紹介された。また、約 20,000 人へのアンケートの結果として「92%がコースに満足」、「76%の教師が自分の授業に影響があった」など非常に高い評価を受けており、利用者からのメール（約 17,000 通）でも、「60%以上が好意的」、「否定的な意見は 1%以下」であるとの報告がなされた。

「4. What does it mean?」では、MIT 全体としてのメリットおよび個々の学部でのメリットが紹介された。前者としては、「MIT の大学としてのミッションを推し進められた」、「MIT のイメージ向上」、「community pride の創出」、「学科間の共同作業への刺激」などが、また、後者としては、「個々の学部のやっていることの紹介」、「学生募集の可能性の拡大」、「Web 利用の拡大」などがあげられた。「OCW が広がるにつれ、MIT 内部での情報公開につながり、他の学科が何をしているのかがわかるようになった点も非常に大きい」とか、「Web でコースを公開すると、学生も十分に予習してくるようになるケースも出て来ている」とのコメントもあった。また、現在、OCW は MIT 以外へも広がりを見せており、特にスペイン語圏を中心とした [universia.net](http://www.universia.net) (<http://www.universia.net> , <http://mit.ocw.universia.net/>) などとも連携しているとのことであった。

最後の Q&A の時間には「MIT のミッションは利益を生み出すこと(make money)ではない」、「OCW へのコースの提供は学科の任意」、「コースを作ることは、最初は重荷だが、結果的には学科の利益になる」という回答・コメントがあった。

IT 技術の進歩による、OCW のような取り組みは、高等教育（特に理系）のさらなるグローバル化や国境を越えた大学間連携の動きを加速させる大きな要因である。このような流れは、もう押しとどめることは出来ない。日本のいくつかの大学でも、すでにこの流れに乗るための取り組みを始めているところも出てきている。金沢大学でも工学部の一部で、このような流れを取り入れているところもあるが、大学全体として、この流れにどのように関わっていくのかを、真剣に考えなければいけない時期に来ているのではないだろうか。（文責 堀井）

センター教員活動記録

2004.9.16,17 東京大学大学院総合文化研究科および教養教育開発室に教養カリキュラム、科目内容について聞き取り調査のため訪問（西山 公費出張）